他市であった事故の一例

○プールから大人が一人もいなくなった時にこどもがおぼれた（他のこどもが鍵をなくしたといってきたので、一緒に探しに行っている間の事故）

⇒プールから大人が一人もいなくなるのは、絶対に避けて下さい。監視の人数が少なくなれば、それだけ事故の対応力が下がります。（一人でも論外ですが）。

○水が反射して見えにくく、沈んでいる子どもを確認するのに遅れてしまった。（死亡）

⇒大人がプールに入って監視をしたり、高い所（監視台等）から監視を行っていたら助けられたかもしれません。

○ＡＥＤ講習を受けた人が来るのをまっていて、手遅れになった。（死亡）

⇒ＡＥＤは誰でも簡単に使えるようになっています。（機械が音声で指示してくれます）

○中々顔を上げないので肩を叩いていたら、反応が無かった（死亡）。

⇒すこしでも様子がおかしい場合は、積極的に声をかけて下さい。

○プールに入ってくる時に興奮した子どもがプールサイドで転んで骨折した。

⇒子どもはプールに入ってくる時に興奮する傾向があります。ゆっくりと気持ちを落ち着かせることが大事です。

他市の安全確保策の一例

○バディ体制

・夏休みプール開放においては、入水前、休憩時、遊泳終了後の３回は必ず児童のバディ（２人組）確認を行う。

・遊泳時はバディになった者はできるだけ近くにいて、相手に異常があった場合は直ちに近くの監視員に知らせる。

○監視用具一式の備え

携帯電話（学校備え付けの緊急用携帯電話）、ＡＥＤ、救急用品、プール日誌、運営・監視マニュアル、タオル、ホイッスル、拡声器、保温用毛布、投げ込み用ブイ（ロープ付）

※どこにあるかを参加者全員が前もって必ず確認しておく。

※プールでの用具の設置場所は表示板等で明示しておく。

※スマートフォンは日中屋外では見えづらいことがあるので注意する。

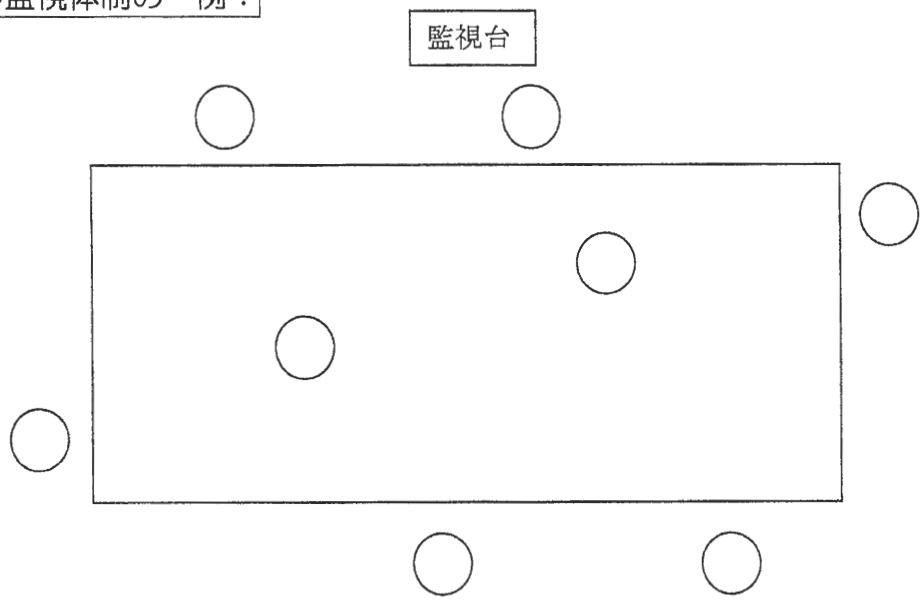
○遊泳時間に十分な休憩時間を設ける。

一例：

受付・準備	13:00～13:10
準備体操	13:10～13:15
１回目遊泳	13:15～13:45
休憩	13:45～13:55
２回目遊泳	13:55～14:25
休憩	14:25～14:35
３回目遊泳	14:35～15:05
休憩	15:05～15:15
４回目遊泳	15:15～15:45
終了	15:45～16:00

○保護者の承認をもらったこどもだけプールにいれる（保護者カードの活用）

プール監視体制の一例：



※プールの中に監視の死角をつくらないようにする。複数の監視人によって二重三重の監視をしてプール全体を見るようにして下さい。

※安全については、安全すぎるほどの体制を整えて下さい。

※体調が万全の子どもにしかプールを利用させない。